
雪の澱

凧久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪の澱

【Nコード】

N3111Z

【作者名】

凧久

【あらすじ】

全ての始まりは吹雪の夜。わたしが出会った人たちは、それぞれ秘密を抱えていた。そして不審な影が忍びより………日常系ダークファンタジー。

第一話

教室はざわざわと騒がしかった。

黒板には「自習」の文字が日直によって書かれ、先生方は職員会議をしている最中だろう。

わたしは窓側の席に座り、頬杖をついて窓の外に視線を向けた。

一面真っ白の銀世界。

普段は遠くに山脈が見え、眼下には常緑樹が並ぶ景色が望める。それが吹雪により何も見えなかった。

生徒たちはゲーム機を取り出し対戦する者や、お喋りに興じる者、自習する人間は誰もいない。

きっと今頃先生方は、このまま生徒を帰路に着かすか議論している。

「早く帰れるに越したことはないけど……」

独り言を呟き、教科書をトントンツとそろえて鞆の中に仕舞う。代わりに読みかけの本を取り出した。

その時、教室の扉が開かれた。

一瞬にして教室が水を打ったように静かになる。

「今日の午後は授業なし。帰っていいぞ」

担任の教諭がそう告げると、今度は喧騒が教室を包んだ。

とはいえ、帰るための手段が乏^{とほ}しい。

ある者は自家用車で迎えに来てもらい、ある者はバスで帰る。R組は嘆いていた。

わたしはバス組なので、生徒の流れに従い昇降口に向かった。

「ああ、ジャージ忘れるところだった」

肩にジャージの鞆を下げ、片手に学生鞆を提げる。

階下を降りて行くと冷気が体を撫でた。校舎の中だというのに息が白くなる。

外に出ると強い風が顔に当たり、雪が容赦なく積もっていく。

わたしは慎重に歩みを進めながら校舎の門をくぐり抜け、敷地から外へ出た。

そこへ

「おねえちゃんっ！ こっち、こっちい！」

声変わり前の高い声がわたしを呼ぶ。

聞こえた方に視線を向けると、黒いバンが停まっております、そこから少年が顔を覗かせている。

見慣れた顔だ。

わたしが通っているそろばん塾 「黒塚そろばん塾」の塾生だ。

そちらに駆けて行くと、

「乗って、乗ってっ！」

他の子供たちが顔を出し、催促する。

わたしは開け放たれていた扉から滑り込むように飛び乗った。ぴたりと雪が遮られ、ヒーターの暖気が体を包む。

「よし、これで全員だな」

前の方、運転席から低い声が零れた。

そこには塾の講師である黒塚先生くろづかがハンドルを握っていた。「うんっ！」と子供たちが元氣よく頷く。

「先生、送迎係ですか？」

わたしは自分の濡れた髪をハンカチで拭いながら訊いた。

「そうだよ。君らのお母さんたちに頼まれたもんでね」

「はあ……そんな事もしないといけないんですね、先生というのは」

先生はゆつくりと車を発進させながら、バックミラー越しに苦笑いを浮かべた。

「モテる男はつらいよ」

「自惚うぬぼれないでください」

わたしは彼の言葉を一蹴した。

第一話（後書き）

新しく連載を始めました。
アドバイスを感想を頂けたら、嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3111z/>

雪の澱

2011年12月10日22時54分発行